

大刀洗町『自分ごと化会議』

地域と障がい福祉のこれから ～住民とともに考える暮らしの課題と解決策～

第1回 次第

日時：令和7年11月22日（土）13:00～16:00

場所：大刀洗町役場 3階大会議室

1. 開会

2. 辞令交付

3. あいさつ

4. 自分ごと化会議の説明

○「自分ごと化会議」とは・全体の流れと進め方の説明（構想日本）

5. 自己紹介

< 休憩 >

6. 全体説明（質疑応答含め）

○テーマ説明～大刀洗町の障がい福祉の現状説明～（福祉課）

7. 全体協議

○会議

○アンケート記入

8. 事務連絡

9. 閉会

<今後のスケジュール>

第2回会議：令和7年12月20日（土）午後1時～

第3回会議：令和8年 1月24日（土）午後1時～

第4回会議：令和8年 3月 7日（土）午後1時～

## 第1回大刀洗町自分ごと化会議 議事概要

開催日時：令和7年11月22日（土） 13時～16時

開催場所：大刀洗町役場 3階大会議室

出席者：委員 17名

### 【テーマ】

「地域と障がい福祉のこれから～住民とともに考える暮らしの課題と解決策～」

議題：

1. 行政・事業所からの現状報告
2. 参加者自己紹介
3. 意見交換

#### 1. 行政・事業所からの現状報告

町福祉課から、町内の障がい福祉の現状について説明。

- ・ 現在、町内では人口の約5.8%にあたる954名が何らかの障害者手帳を所持しているが、そのうち実際に町の福祉サービスを利用しているのは約3割の312名に留まっている。
- ・ 手帳を持つ人の約7割が、サービスを必要としていないのか、あるいは情報が届いていないのかが把握しきれていない。
- ・ 行政として、発達障がいや内部障がいといった「見えない障がい」への無理解や、情報が本当に困っている人へ届かない状況が、解決すべき喫緊の課題として認識。

医療福祉センター聖ヨゼフ園

- ・ 120名の入所者を、200名のスタッフが支える大規模施設。コロナ禍を経て地域との繋がりが減り孤独感は出ている。特別な資格や技術はなくても、散歩の相手や話し相手として、地域の方に存在を感じに来てほしいという。

株式会社 Unique

- ・ 代表の自分（長野さん）自身が「問題児」扱いされた経験があり、個性を尊重する支援を追求している。
- ・ 診察まで1年近く待たされたり、医療的ケア児を受け入れる場所の不足が、救えるはずの子どもたちを阻んでいるという面がある。

社会福祉協議会

- ・ 社会福祉の制度はとても複雑。どこに相談すればいいかさえない住民の苦しみに寄り添う中で、不便を感じさせる環境こそが障がいを作っているのではないかと感じる。

#### 2. 委員自己紹介

自己紹介を通じて、委員一人ひとりの経験や率直な思いを発言してもらった。主な意見は以下の

通り。

- ・障がいという言葉そのものに触れにくさを感じており、話し合いが難しいテーマだという戸惑いがある。
- ・身近に障がいのある人がおらず、自分とは無縁なものだと思っていた。
- ・学生時代から今まで、障がい福祉について勉強する機会がなく意識が薄れてしまっている。
- ・学校で習う機会が少なく、どう接していいか分からなかったため、触れにくい話題だと感じている。
- ・外見からは分からない内部障がいがある当事者として感じるのは、高齢になれば誰もができないことが増え、障がい者になっていくということ。だからこそ、障がい者に優しい社会は高齢者や若者まであらゆる世代に優しい社会であるはず。
- ・実母が倒れて障害認定を受けた今、手伝うべきか見守るべきかの線引きが分からず悩んでいる。
- ・亡くなった兄に障がいがあった経験から、親亡き後の兄弟としての負担や責任を痛感してきた。
- ・自分の仕事をこの先も続けていくためにも、地域で自分に何ができるのかを真剣に考えたい。
- ・保育の実習や、ホールの接客、介護の現場などで障がいのある方と接する機会がある中で、誰もが安心して暮らせる方法について改めて考えたい。

### 3. 意見交換

- ・自分もコンタクトを外せば何も見えない。それも一つの障がいだと思っている。障がい者という言葉で線を引いて「特別な誰か」として区別すること自体が、逆に心の壁を作ってしまったのではないかと感じる。
- ・子供たちには、みんな何かしら苦手なことがあるだけなのだと日頃から伝えている。障がいもまた、その苦手さの延長線上にあるものとして捉え直したい。
- ・ボランティアの経験から、自分が勝手に『障がい』というフィルターを通して相手を見て、身構えていただけだった。触れ合う機会さえあれば、その勝手なフィルターは自然と外れるはず。
- ・（障がいを持つ当事者として）実際にヘルパーを頼もうとした際に「町内にいない」と一言で断られた。制度があるかどうか以上に、まずは相談者に寄り添う状況が欲しい。
- ・町の広報誌は生まれた赤ちゃんの写真を掲載するけれど、高齢者や障がい者の写真があったり、「障がい者・高齢者特集号」みたいな時があってもよいかも。多様な人が共に生きる大刀洗といえるのでは。
- ・「交流しましょう」とあえて意気込むイベントは、かえって不自然な壁を作ってしまう。そうではなく、祭りに当たり前にみんなが混ざり合っているような「ごちゃまぜ」の場を、特別なことではない日常の風景にしたい。

### 4. コーディネーターとりまとめ

- ・「障がい者が身近にいないので話を出しにくい」「詳しいことがわからない」という意見が多

かったが、それ自体が重要。

- ・次回までの宿題として、皆さんの身の回りに障がいを持っている人がいなかったとしても、話を聞いてみたり、少し調べてみたりして、エピソードを持ってきてほしい。そこから次回を始めたい。